

2年前の夏にマッターホルンにガイド付きで登ろうと計画したが、骨折などの事故のため中止したことがあった。

8月6日夕方、BVZの電車がティッシュの駅を過ぎツェルマット近くになってもマッターホルンは見えなかった。ツェルマットの街に入って、遅い日が暮れても、とうとう見えなかった。あの方角に見えるはずだが、頂上はあの辺りだろう、と想像する。

7日、5時に起き、ベランダに出て見ると、真っ暗だ。天気の悪さがあるのかもしれない。早朝登山電車でゴルナグラートへ登る。展望台まで上がると、モンテローザ、ゴルナー氷河、リスカムなどは見える。概念図で予習してきた通りだ。モンテローザの小屋の屋根根がかすかに見える。マッターホルンはその全体を見せない。その辺りだけが雲がかかっている。その北のオーバーガベルホルンの方向はまた晴れている。東側にシュトクホルンが三角形に見える。寒い展望台で我慢していると、登ってくるのは日本人が多い。その辺りは、地表の荒々しさが剥出しという印象だ。

レストランで休む。暖かいココアがおいしい。痺れを切らして電車に乗ろうと駅に下りていくと、雲が晴れそうな感じがして、再び展望台に上がったが、やはり見えなかった。当たり前だが、いつも写真で見るとはいいかない。

同志会の人達が滑ったゴルナー氷河、グレンツェ氷河を見て下る。

一つの日当てのリフェルアルプからグリュン・ゼーのハイキングをした。地図も持っていたが道標がしっかりしている。年配の人々がゆっくり歩いている。荒々しい岩稜の山々や氷河と違って緑豊かなアルプが対照的だ。グリーンジゼーで休んでいると、前の方に頂上に雲がかかったマッターホルンが見えた。四角錐を伏せたような感じで異型だ。ヘルンリ稜、北壁の下部に雪、氷が付いている。

さらに歩き、フィンデルンという村に入る。そこの鼠返しの下から見るマッターホルンが典型だ。大きな材木で作った校倉作りの小屋は、焦茶色で古めかしさに親しみを感じる。村のなかにスイスの旗が立てられていると、そこが田舎風レストランだ。

ハイキング中はとうとう頂上を見ることが出来なかった。ヴィンケルマッテンまで下り夕立に遭い、スーパーマーケットで雨宿りをした。

夕飯を食べるために街に出ると、ちょうど日本の川に沿う温泉街から山を見るようにマッテンフィスバ川の橋の上から雨雲が切れ、ようやくマッターホルンの姿が見えた。北壁が手前になっているので、左(東側)に頭を曲げている。橋の上にカメラの人が集まってきた。この山を見に来たのだ、と思う。しばらくすると、また雲の中に入った。

翌8日早朝、モルゲンロートの頂上を宿から見、スケッチをした。その日はマッターホルンの登山口である、シュヴァルツゼーまで上がり、北壁の下、シュタフェル・アルプを歩き、宿に帰った。ヘルンリ小屋を見たが、北壁を、そしてその迫力を想像するばかりだった。ツムットの村は風情のある(前近代的、または自然にとけあっている)村で、大休止をし、景色を楽しんだ。